

# 「下村満子の生き方塾」ニュース

Vol.13 2017.08.

## —2017年3月勉強会—



### 思いを込め、Ⅶ期締めくくる



開会の坐禅を行う塾生

「下村満子の生き方塾は3月25日、福島県二本松市の福島県男女共生センターで、Ⅶ期最後の勉強会を開きました。遠藤正志塾生の点鐘による坐禅、菅野寿男塾生のリードによる塾生五訓の唱和に続いて、下村満子塾長があいさつしました。下村塾長は「去る2日に行った小泉純一郎元総理の『原発ゼロ特別講演会』では、いざという場合にはものすごいパワーを発揮する私たちの結集力を示すことができました。2300人も聴衆が詰めかけ、小泉さんも驚いていました。東日本大震災の時、アメリカ海軍が被災地救援のために実施した『トモダチ作戦』について小泉さんは話さなかったの、これについては後日あらためて、デモクラ・テレビの下村満子の『テレビ生き方塾・文句あっか!』で取り上げます」などと話した後、4月に東京の鳩山会館で行う修了・入塾式では、原発ゼロの延長線上にある、自然エネルギー推進を訴えたドキュメンタリー映画「日本と再生」を上映します、と語りました。

皆川猛福島代表世話人が、Ⅶ期を迎えるにあたって、規約を改正したことなどを報告し、続いて宮城県石巻市の阿部利彦塾生が「塾生 自分を語る」を行いました。午後からはNHKスペシャル「ばっちゃん」のDVDを鑑賞し、「ばっちゃん」をテーマに下村塾長が講話し、応援団のジャーナリスト川村晃司さんが、森友学園と安倍昭江・首相夫人の問題などについて、マル秘とも言える深掘り情報を明らかにしました。「カスミ」で開いた夜遊び学では、激動する世界や日本の今後について川村さんに質問が集中し、盛り多い場となりました。この日は佐々木慶子塾生の知人が入塾を前提に、オブザーバー参加をしました。

(文責・皆川猛)

## 世話人の報告

### ● 伊東優子塾生が事務局長に

塾長挨拶のあと、皆川世話人は、Ⅶ期からの「生き方塾」の運営体制や、主な規約改正事項などを報告しました。

①現行の規約は塾が発足した2011年4月から施行されていますが、曖昧だったり不合理な点、現状に即さない箇所が目立ってきたため、昨年夏から塾長、三田事務局長、世話人が4回ほど集まり、改定作業をしてきた。主な改定事項は以下の通り。

#### ㊦本塾は、塾生と準塾生で構成する。

塾生は、福島、東京、その他の会場で開かれる定例勉強会に出席できるほか、塾長、応援団との懇談会や食事会、観劇、旅行、塾生の悩みごと、相談などに対して、塾長が助言する塾長カウンセリングなど、特別なプログラムにも参加できる。塾生は、「下村満子のテレビ生き方塾『文句あっか!』」収録を見学できるほか、番組によっては出演もできる。

最初から福島または東京だけの出席を希望する塾生を、

準塾生とする。ただし塾生を二期以上修了し、塾長の承認を得た後、福島、東京だけの出席を希望する者も塾生とする。

塾生を二期以上修了した後、塾長の承認を得た福島または東京だけの出席を希望する塾生や、準塾生が、登録外の会場で開かれる勉強会に出席する際は、一日当たり参加費5000円を支払う。

OB、OGが定例勉強会に出席する場合は、参加費5000円を支払う。

#### 「下村満子の生き方塾」塾費規定

- ・塾生 年6万円
- ・塾生を二期以上修了した後、塾長の承認を得た福島または東京だけの出席を希望する塾生 年36000円
- ・準塾生 年36000円

塾費は開塾する4月に全額を、所定の銀行口座に振り込むことを原則とするが、分納もできる。途中から入塾する際は、入塾月から月割りで計算した塾費を納める。

## ①オブザーバー

本塾に関心を持ち、入塾をしたい気持ちがあるが、入塾前に「生き方塾」を体験してみたいという人を「オブザーバー」と呼ぶ。オブザーバーは、定例の勉強会を受講できる。初回は無料、2回目は、塾費一日分 5000 円を納める。ただし 3 回目以降の受講は入塾しない限り認めない。

②「生き方塾」の事務局は、発足時から、三田公美子塾生

が社長を務める(株)企画室コアに置き、事務局長は三田公美子塾生が務めていましたが、来期から三田事務局長は副塾長に就き、事務局長は、開塾以来の塾生である伊東優子さんに引き受けてもらうこととなります。事務局は福島市のキング印刷内に置きます。この日、伊東次期事務局長は、所要のため欠席しましたが、ビデオレターを通じて、塾生の協力を訴えました。

## 塾生自らを語る 1200ccバイクで北米大陸ひとり旅

世話人報告の後、登壇した阿部塾生は、「第二の人生のスタートに当たって、語学留学 10 カ月と北米大陸をバイクで 3 カ月 3 万\*<sub>0</sub>ひとり旅」と題して、『自分を語る』を行いました。

阿部さんの講演要旨は、次の通りです。

### ● 大津波に遭い計画先送り

——石巻高校に通っていたころの私は、英語だけは得意で、東京の私大の英文科に推薦入学することが決まっていました。英文科に入って商社マンになれば、世界を股にかけて活躍できると考えました。しかし、両親がガンで亡くなり、高3の11月に進学を断念せざるを得なくなりました。でも還暦になったら、仕事の第一線から退き、世界中を回ろうと意思を固め、そのためには、まずアメリカで語学留学したいと考えていました。高校を卒業してからは、仙台に本社のある会社に就職してサラリーマンになりました。1年後東京の会社に移り、サラリーマン。26歳で宮城県に戻り、保険の代理店を起こしました。その後、ある企業に不動産業部門を起こす事を要請されて、33歳で不動産業界に入りました。39歳で尿管がん(第4期)を患い手術。60日間の入院生活の後、退院して退社。その後、42歳で店づくり専門の不動産会社を興し、現在に至っています。

私は子どもたちに事業を継がせる気は毛頭なく、息子たちはサラリーマンになりました。60歳になり、長年温めて



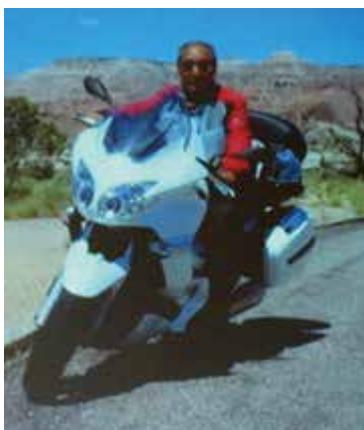
北米バイク一人旅を語る阿部さん

きた計画を実行に移そうと思っていました。

2011年3月11日午後2時46分、巨大地震が東日本を襲い、それから1時間も経たないうちに大津波が石巻にも押し寄せてきました。後述しますが、津波からは間一髪で逃れ、命が助かりました。でもこの予期せぬ大災害で、計画実行は先送りするしかなくなりました。

### ● まずはロスで10カ月英語猛勉強

2015年7月、ひっそりと単身、カリフォルニアに飛び、ロサンゼルス語学学校で10カ月、若いクラスメートと机を並べて英語の勉強をしました。この間、ロスマラソンも見たし、ハリウッドなどの名所や観光地に出掛けて、貴重な体験をしました。24時間英語漬けの毎日だから、英語力はかなり付くと思ったのですが、残念ながらその成長は僅かでした。昨日習った単語を、今朝忘れていた始末。劣等感に打ちひしがれながらも、半年経過して、家内にも10日ほど来てもらって二人で西海岸を旅しました。精神的にかなり助かり、勉強を続けることが



颯爽と1200ccバイクを操る阿部さん

できました。

2016年4月20日に、イタリアのバイク、1200ccのモトグッジーを購入して、5月28日から北米大陸の旅に出ました。旅に出る時、ロスの日本領事館から、2015年11月にパリでISによるテロが発生し、中東などからの難民が殺到するEUは、バイクによる単独旅行が許される状況ではなくなったと言われました。メキシコでは麻薬による混乱が際立ってくるなど、中南米の治安も決していいとは言えない。銃社会のアメリカ国内でも、乱射事件は後を絶ちません。実際、2016年6月12日には、フロリダ州オーランドのナイトクラブで、60人が射殺される、IS信奉者と見られる人物によるテロ事件も起きました。

安全は保障できないという領事館から、北米以外でのバイクツアーを中止するよう勧告を受け、結局、世界一周は断念せざるを得なくなりました。

2016年5月28日、語学学校の友人らに見送られ、ビバリーヒルズを出発した。カリフォルニアを北上、ユタ州ソ

ルトレークから南下、中西部を経由してダラス、ヒューストン、フロリダ、東海岸北上、カナダ横断をして、太平洋岸のバンクーバーでゴールしました。テキサス州のダラスでは、サンディエゴで紛失したカメラを私に送ってくれたアメリカ人と感動の会食。アメリカ人は、口で言われているほど、

不親切な国民ではないと思いました。

北米大陸3カ月3万<sup>キロ</sup>、72都市訪問の一人旅が終わった時、充実感というか、達成感を味わうと同時に、心地よい風が体内を抜けていく気がした。何のトラブルもなく一人旅を終えられたことは、ラッキーだったと思います。

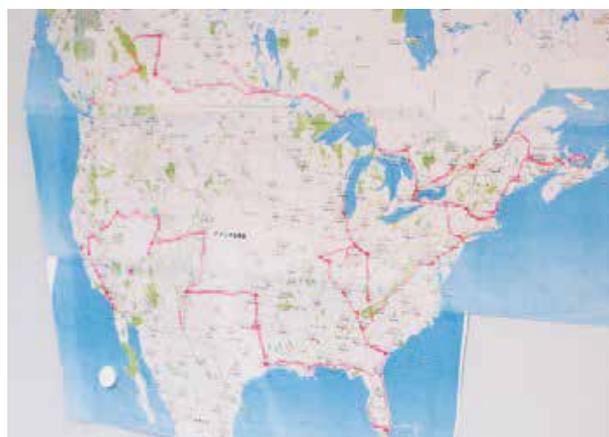
## ● 偶然重なり九死に一生得る

大津波からどうやって逃れられたか。

私の家は海岸部から800<sup>メートル</sup>ほど離れているから、大丈夫だろうと思いつつ、仕事先から急いで家に向かいました。家に着いて、家内と次男の無事を確認して、隣家の小学生2人を案じて行くと、「ママが帰ったから大丈夫」とのこと。それを聞いて振り返ると、黒い水が押し寄せて来ていました。急遽庭石に上がり、さらにスチール製物置の屋根に上がりました。その津波は、物置にも到達したのですが、物置は、なんとエレベーターのように、隣の家の屋根の高さにまで垂直に浮き上がったのです。私はとっさに物置から屋根に飛び移り、私がいなくなった物置は、すぐに斜めに傾き、水没していきました。垂直に浮かなかつたら、隣家の屋根がなかったら、家に戻るのが少しでも遅れたら…。偶然が幾つも重なり、私は九死に一生を得たのです。

考えてみれば、私はこれまでに、二度がンを罹っています。それでも元気にやっています。大震災でも命を拾っています。私の信条を申し上げます。

信頼構築のために、①約束時刻は厳守。腕時計は2分進めている②商談は最長1時間。短所から説明して長所は最後。世間話はしない③キャッチボールは気持ちよく。受けたらずぐ返す一などであり、私生活では、①若者や後輩には、異議なし、上司や先輩には異議あり②感動する努力を忘れない③息子たちには将来とも、物より人を大事にせよ。



赤線部がひとり旅ルート

ある物を売って楽になれ④趣味は必ず持つこと一など。「どんな親に育てられたか？」と聞かれる事がありますが、母はお人よしバカと言われ、父は働き者でした。詭弁を使えば「命を捨ててまで、私たち子どもを鍛えてくれた」と思っています。

最後に一言。今回の長いひとり旅で、自分がない自分の環境を見ました。結局、「俺って、いなくてもいいんだ」と分かりました（笑い）――

## 塾長講話 強欲とは対極の「ばっちゃん」

今期は、資本主義の危機と、それに関連した日本や世界の情勢について学んできました。強欲な資本主義が格差を生み、それがテロや差別といった「負の連鎖」を作り上げているのが今日です。

NHKスペシャルは、転換期に直面している資本主義を真正面から捉えた企画なので、3回にわたりDVDを見てもらいました。

ITを駆使したマネーゲームの資本主義が、ピークを迎えています。リーマンショック後、若い投資家たちの中には、それまでは行政が行ってきた福祉事業に投資し、それなりの利得を得ています。投資先も資金が豊かになるので、きめ細かいサービスができます。双方に取って利益になっ

ています。

これは新しい動き、B級ビジネスと言っていいでしょう。つまり、「大きいことはいいことだ」から「小さいことはいいことだ」という流れが台頭しているわけです。新型の配車サービスのウーバー、空いている部屋を観光客に提供するエアビー・アンド・ビーのように、個人事業主が主役となる経済活動です。このB級グルメならぬB級ビジネスについては、来期になったら説明したいと思っています。

今日は強欲資本主義とは対極にあると言ってよい、NHKスペシャルが取り上げた「ばっちゃん」というドキュメンタリーを見てほしい。思わず涙が出てくるほど感動する作品で、あの三田事務局長も絶賛しています。

## DVD上映 NHKスペシャル「ばっちゃん」

### ● 空腹を満たせば非行は減る

「罪を犯してしまう子どもたちは、みんなお腹を空かせている」。そう言って、その立ち直りを30年以上支えているのは、広島市中区基町に住む中本忠子さん(82)だ。「腹が

減った時といたら、みんな悪さをする事しか頭にない。女の子なら売春、男の子じゃったらカツアゲ、ひったくり、万引き。お腹が空いた時、考えることは、それしかない。

これは10人が10人みんな同じさ」。

この話に出てくる少年は「腹減ったら悪いことしか考えないと言う『ばっちゃん』の話は、ほんまその通りかなと思うんですよ。腹減ったら、とにかく、何か食いもん欲しいなと思って。金なかったら、とるしかないと考えていたんです」と、うなづく。

「腹減ったら、思考能力とかも落ちるじゃないですか。イライラして、それでも、何でもいいや、みたいなのか。これぐらいいいじゃろうと、あんまり考えなくなる」とは別の少年だ。

子どもたちは、中本さんのことを「ばっちゃん」と呼んでいる。自分のおばあちゃんではないけど、近所のおばちゃんよりは、身近な存在だからとのこと。そんな「ばっちゃん」のお話をしたい。

### <非行の原因は「空腹」にあると子どもたちに食事を提供している“ばっちゃん”>

問題を抱えた少年たちが、毎日駆け込んでくる。そんな噂を聞きつけた2011年11月、ばっちゃんの取材を始めた。ばっちゃんは40代の頃から、罪を犯した少年の社会復帰を手助けする保護司というボランティアをしてきた。活動を始めてすぐに、非行の原因が空腹にあることに気づ

き、それから子どもたちに手料理を振る舞うようになった。いつしか担当する子どもだけでなく、その友達も来るようになり、それを見かねた地域の女性たちも手伝いに来る。こうして賑やかな家になった。貧困や育児放棄、ここに集まってくる子どもたちは様々な理由で食事をとれずにいた。

ばっちゃんのご飯を食べ、すぐに非行が収まる子もいれば、何年もかかる子もいる。それでもばっちゃんは毎日料理を作り、子どもの声に耳を傾けていた。お腹を空かせては非行に走る子どもたち。繰り返していると、罪の意識がどんどんなくなってしまふ。

「そりゃ人間、お腹が空いてごらんよ。落ち着きなさいって言うたって落ち着かんと思うよ。手作りというのが一番いいんじゃない。どんな荒れた子でも収まると思うよ。だって私、それで収めてきたもん」と中本さん。

ばっちゃんの家は子どもたちにとって、数少ない甘えてもよい場所。外では威勢を張り、隠してきた本心も、思わずさらけ出してしまふ。いじめを受けていることを少年から打ち明けられたばっちゃんは、解決するために、いじめた子たちに、やめるようきちんと話をする、と約束した。そして、悩みを打ち明けた後においしいご飯を食べる子どもは、心が満たされ、辛かったことも不思議と笑いに変わる。

## ● 行き場がない子に行き場を提供

少年院に入ることになってしまった一人の少年がいる。ばっちゃんは、子どもたちの立ち直りが、以前にも増して難しくなっていると感じていた。社会全体に広がる不寛容な空気。過ちを犯した子どもへの風当たりは強く、居場所を見つけることは容易ではない。実際、犯罪で検挙された少年のうち、再犯者の割合は年々増え続けている。多くの少年が悪循環から抜け出せずにいる。

中本さんは言う。「そういう子どもたちっていうのは、行き場がないんですよ、結局は。行き場がないがために、やっぱりさまようて。いいところへは集まらない、行かない。だから帰る場所、行く場所がない子は、ものすごく心がすさんどる」。

2013年9月。ばっちゃんが特に気にかけている少年がいた。中学2年生のマコトは、14歳だ。幼い頃からお腹を空かせては、ここに出入りしていた。この頃、母親が再婚したばかり。父親にはマコトと同じ年の連れ子がいて、新しい家族とは会話がなかった。

「家に帰っても暇だったけ。することないけ寄ってみたら、ばっちゃんがおったけ」とマコト。マコトは、ばっちゃんの家に来ないときは、夜遊び回り、たびたび問題行動を起こしていた。彼の家はばっちゃんの家近くの、なかなか家には帰ろうとしなかった。

「お父さん、お母さんは？」と聞くと、「おるけど、何もすることがない。暇なんよね」。「マコトにとって中本さんの家は、どんな感じ？」には「どんな感じって言われたら、いい感じ」と返事する。この1年ほど後、マコトは少年院に入った。彼が入ったのは広島県の少年院。ここでの生活は1年を超えた。

仮退院が近づいたとき、あることが問題になった。昔の仲間がいる広島では更生が難しいと、マコトの親が言った。

結局ばっちゃんが、愛知県のNPOに引き受けを頼み、そこで更生を目指すことになった。マコトは愛知県の少年院に移され、2016年5月、仮退院の日を迎えた。「痩せたんじゃない？」との問いに、「だいぶ痩せました」。「今の気持ちは？」には「こわい、不安です」と答えるマコト。「どうしてこわいの？」に「ちゃんと生活できるかなと思って」。

中学の卒業式にも出席できなかったマコトは、たった一人で新しい生活を始める。携帯電話を渡され、真っ先にかけたのは、ばっちゃんだった。この電話に中本さんは「よかったの。ばっちゃん嬉しくて涙が出そうだよ」。

住む場所と最低限の家財道具は、NPOが用意してくれた。知り合いが誰もいない土地で更生を目指すマコト、まだ16歳だ。「不安だって言ってたけど、どういこうか？」と尋ねると、「全く分からんじゃないですか、土地とか。仕事行くにしても、ちゃんと行けるんかなって。新しい友達ができて、そっからまた悪いほうに行くんじゃないかなって。自分としては友達作らんほうがええんかなって思ったりはしてます。どうしていいか分からんのです。気持ちの整理とか、まだできてないんです」とマコト。「不安に負けないためには？」と聞くと、「ちゃんと、ばっちゃんにも相談しようと思ってます。ばっちゃんとは、ずっと関わっていきたいと思って。言葉で言にくいんですけど、どんなに切れと言われても絶対に切れんかっていうのがあって。切りたくないし。ばっちゃんがおるけ、ちょっとは安心できるかな」。

## ● 生き方は変えられる

マコトには新しい生活を始める前に、やっておきたいことがあった。それは、ばっちゃんに会いに行くこと。当面の生活資金として親から貰っていた5万円。散髪をし、深夜バスのチケットを買った。ばっちゃんの家に通い始めたのは小学校4年生の時だ。マコトの行動を心配した学校の先生が、ばっちゃんのことを教えてくれた。何かあると心配してくれるのは、いつもばっちゃんたちだった。

早朝、マコトは広島に着いた。一方、ばっちゃんは、料理を作っていた。この日ばかりはマコトのためだけに。

「昨日も私、マコトとかなり電話で話をしたよ。自分も苦しいって言いよったよ。『俺はなんで、こういう家庭に生まれたん?』と言うね。だけど、生まれた家庭を変えることはできんじゃけ、でも生き方は変えていけるじゃって。生きることは自分でね、変えていけるじゃんって言うんだけど、月日がかかると思うよ」と中本さん。

ばっちゃんが作っていたのは、マコトが小さい頃から好きだった親子丼だ。

「どう?マコト?」と中本さん。「うまいっす」とマコト。「昔と味、変わっとる?」「全然。大丈夫です。まんまです」

ご飯を食べながら、マコトはばっちゃんに、いろいろと注意された。昔と変わらず、本当にこまごまと。1年ぶりの広島で、マコトは多くの友人に会った。お腹が空くと、ばっちゃんにご飯を食べながら、まことはこう語った。「審判の後、自分が少年院に行って泣いたって聞いたんで、ばっちゃんが。ほんまヤバイなって、自分の中で危機感、感じたんで。絶対悲しませちゃいけんなって思っ」

「少年院の面会室で会うのと、ばっちゃんちで会うのとは違うじゃろ?」と聞くと、「はい。だいぶ違いますね」とマコト。「やっと出てきたんじゃって実感が湧く。会うのにも時間も限られてないし、何しゃべってもいいし、ほんま出てきたって感じがする。料理は変わらず、ばっちゃんの味ですね」。

マコトの同級生は高校2年生。皆、楽しそうに学生生活を送っていた。一方、知らない土地で一人で暮らすことになったマコト。仕事を探すのだけでも容易ではない。

### <地域住民と子どもたちが交流する取り組みも>

居場所のなさ、子どもたちを非行に走らせ、立ち直りの可能性さえも奪ってしまう。ばっちゃんはこの数年、家にやって来る子どもたちと地域住民とが交流する取り組みにも力を入れている。

## ● 巣立ったこどもは300人

2016年9月、敬老の日に、ばっちゃんの家を訪ねると、子どもたちから沢山の贈り物が届いていた。「みんな、みんな思い出の濃いのがっかり。やっぱりね、こういう風いのは、通りいっぺんの子もいっぺんはくれんじやろうと思うよ」と中本さん。82歳。最近は仲間も増え、寄付も寄せられているというものの、なぜ続けられるのか。そんな疑問をど

「食べて語ろう会」。

一緒にご飯を食べ、顔なじみになることで、地域が子どもの居場所の一つになれないか模索している。会には子どもたちの親も呼んでいる。ある母親は、3人の息子がばっちゃんの家に通っていた。

この日、ばっちゃんは母親に、少年院にいる息子から届いた手紙を渡した。そこには漢字も多く使われ、周囲への感謝の気持ちが綴られていた。自分が知らない息子の成長が手紙の中に溢れていた。「かわいいじゃろ。しっかりと、帰ってきたらお母ちゃんをするんよ。しっかりと、お母ちゃんじゃけん」と中本さんは励ます。親自身が、家庭の温もりを知らずに育っていることも少なくない。どうしていいかわからない親に、ばっちゃんは何度も語りかける。

今夜、寝る所がないという少女から電話が掛かってきた。次の日、電話をしてきた少女がばっちゃんの家に来て来た。彼女は家族に暴力を振るったため、家にいることができなくなった。住み込みの仕事を始めたが、続けられなくなったという。住む場所をなくした少女だが、親の同意が得られないため、自分でアパートを借りることもできない。親への暴力は、全く自分に関わろうとしないことへの怒りだったという。

少女に聞いた。「育児放棄って、ご飯が食べられなかったってこと?」。すると少女は「ご飯どころの話じゃない。面倒一切見んけ、うちの親は。産むだけ産んで置いとるみたいな感じ。ばあちゃんとかおらんかったら、今頃、生きとったかどうかも分からんけ。小さい頃は、あんまり育児放棄の意味が理解できてなかったけ。分かりだしてからは、つらいどころの話じゃないよね。ばあちゃんまでおらんかったら、誰に頼ればいいんじゃろみたいな」。

「何が一番嫌だった?」「やっぱり一番つらかったのは、居場所がないことよね。精神的な面で、心の居場所がないことが一番つらいね、やっぱり。でもうち、絶対自分が不幸とか思わんのよね、それだけは。それなりにつらいこともあったけど、全然不幸だとは思わんね。それも人生だと思えば、どうってことない、今は。それと同じことを自分がせんかったらええだけじゃけ」

心の居場所を求めて、もがき続ける子どもたち。その声に私たちはどれほど気づけているのだろうか。

うしても抱いてしまう。

「継続って言っても大変じゃないですか?」と質問する。「それ、みんなが聞くんよ。『こがいに大変なの、なぜ続けるん?』と言うけど、私にも、よう分からんよ。たんびに『もうせーん!』と言うんよ。『なんでこまでせんやいけん』と言うんじゃが、何でかね?しょっちゅうヒス起こすことが多

いよね。だって朝3時半から起こされてごらん」と、中本さんは答える。「それでも続くのは、中本さんにも喜びが?」とかぶせると、「ありやせん。つらいばかり。ほんまに、何で弁当も作り、あれをし、これをし、すりゃの、感謝の気持ちなんか、ちいとは持てや言うんよ。ドブに捨てたら、ドブなりとも音がするんよ。お前らにしてやる分は、音もでんにや、感謝の言葉もありやせん。うちが、よう怒るんよ。『何だか言え』と言うたら『どう言うん?』と言う。どうにもならんじやろ。『ありがとうぐらい言えや!』と言うたら『ありがとう言うときやええん?』と言う。なんと腹が立つじやろ」と中本さん。

ここから巣立っていった子どもは、300人を超える。かつて暴走族のリーダーだった少年から、最近、連絡があった。長男の就職が決まり、次男は専門学校に入学したとのこと。薬物に手を出していた女の子は母となり、最近息子が結婚したと報告してきたという。

2016年10月。少年院を出てから5か月、マコトを訪ねてみると、働き始めていた。勤め先は近所の居酒屋。開店前の掃除や仕込み、そして接客。お酒の種類やメニューなど覚えることもたくさんある。でも目標ができた。

「保育士なろうかなと思っているんですよ。考えたときにふと思ったのは、ちっちゃい子好きじゃけ。面倒見るのも苦じゃ

ないかなと思ったんで。保育士目指してみようかなと。自分の中でも簡単じゃないっていうのは、分かってますけど、目指してみようかなと。短大行って資格取ろうかな」とマコト。

うまくいかないことや壁にぶつかることもたくさんある。それでも自分の人生を歩み始めていた。一人暮らしにもだいぶ慣れた。ただ一つ、離れてみて、ばっちゃん存在の大きさを改めて感じている。「いつもだったら当たり前みたいに、ばっちゃんの家行ったりしよったのが、こっち来たことで行けないじゃないですか。当たり前じゃなくて、本当にいいことなんだなって。普通じゃあり得ないことなんだなって感じました」と言うマコト。「今でも行きたいなってことある?」と尋ねると、「普通にあります。でも言えば今すぐにでも行きたいくらいです。ばっちゃんの飯が食べたいです。前は食堂みたいな感じだったんですけど、自分の親として会いたいな、というのがあります」。「前は食堂だったんだ?」と思いを確認すると、「とりあえず、お腹空いたら電話して、みたい。今は普通に食堂じゃなくて、ばっちゃんの家として行きたいです」。

「ばっちゃんに会ったら、ばっちゃんは何て言うかね?」「悪させんかったら、それでもいいんじゃないかねって言いそうです。『悪さするより電話してきて、えらかった、えらかった』と言いそうです、ばっちゃんなら」

## ● 今日ご飯を作り続ける

台所でおにぎりを握るばっちゃんがいる。「今日はね、給食がないじやろ。休みじゃけん。今朝からご飯3回炊くんよ」「今日も誰か来るんですか?」と問うと、「分からん。この頃は誰が来るというような約束はしない」と中本さん。「なぜ続

けられるのか?」と繰り返し尋ねる私たちに、ばっちゃんはある日こう言った。「子どもから面と向かって、助けて、と言われたことがない人には分からないんじゃないの」

【DVD終了】

## 塾長講話再開 貫いている無償の愛

なぜこのDVDを皆さんに見てほしいと思ったか。その前に、塾生の皆さんから感想をもらいたいと思います。述べられた感想は以下のようなものでした。

- ・自分の信念を貫いて、できることをきちんとやる。凡人にはなかなかできないことだ。
- ・非行に走る子を、どうして両親が育てたのか。憤ってしまう。負の連鎖は、最終的に子に回ってくる。
- ・中本さんのように、損得抜きで頑張っている人がいることに、心を打たれた。やり続けていることに頭が下がる。
- ・男の子が2人いるが、彼らに本当に向き合っているか自信がない。今の子どもたちは、居場所がないことが分かった。日本は経済面では恵まれた国だが、帰る場所、心の居場所がない子どもが多い。こんな中で、何を言っても怒らないばっちゃん存在意義は、大きい。
- ・いかに生きるべきか。ばっちゃんのような生き方はできないが、自分にも世の中に役立つ何かできることがあるはずだ。何ができるかを考えるいい機会となった。自分の周りを幸せにできないのでは、自分も幸せにはなれない。
- ・空腹が悪さを起こさせると言うばっちゃん言葉に納得し

た。転職しようとしたとき、ある人はやりたいようにやれ、と言い、ある人は本当に怒ってくれた。どちらが本気で人に向かっていったか、ばっちゃんを見て、よく分かった。

- ・6年前の大震災で、初めて差別を体験した。ばっちゃんは差別をしない人であり、実に寛容な人なのだ。
- ・心の居場所を提供しているばっちゃん。自分にこういったことがあったろうか。一見豊かになった日本だが、このばっちゃんを見て、裏側の社会を見た。具体的な行動はとれないけれども、腹を空かした子どもへの食事提供は取り組めると思った。
- ・感動して泣けてしまう。自分の子どものように育てる。評論家は多いけれど、こういう人もいることを知った。
- ・子どもには、「あなたを支えている人がいる」ということを感じてほしい。
- ・無償の愛、利他の実践。利他をして感謝されないと、ムカッとすけれど、この人は心のレベルが高いから、怒らない。すごい人だ。
- ・日本は優しい社会のように見えるが、いったん失敗すると、すぐ駄目な人とレッテルを張る。私は中本さんのように、捨てられた人を救おうとする活動は、できない。
- ・老人クラブで下校時の児童を見守る「ふれあい安全隊」を

やっている。これだけでも大変なのに、ぼっちゃんをよくやっている。ただただ頭が下がる思いだ。

・昔は、ぼっちゃんのような人がけっこういたから、悪い方向へ走る子どもを修正できた。活動に対する代償を求めず、子どもが立ち直る姿を見ることに喜びを感じる中本さんだから、子どもたちも中本さんの前では決して悪さをしない。中本さんのような考えの人ばかりだったら、悪さをする子どもはいなくなるだろう。

## ● 血肉化している「ぼっちゃん」の利他

こうした感想を受けて塾長は以下のように結びました。

ぼっちゃんこと中本さんは、あどんなに困難に遭っても、一切ブレません。利他をしているわけですが、本人にはそんな意識はなく、「やらずにはいられない」という自分の内側から突き上げてくる思いで、ひとりでやっているのです。稲盛さん流に言えば、利他が血肉化しているのです。

稲盛さんは言います。「人は私をお金持ち、成功した人と言うけれども、成功体験やお金は、それ自体に価値はない。人は裸で生まれ、裸で死ぬ。死ぬ時は、ホームレスで死んでも金持ちで死んでも、全く同じことだ。何が大事かと言えば、無我夢中で仕事などをしていれば、死ぬ時、心を高めた状態で来世に行けるということ」。

私はいい暮らしをしたいという人間の物欲を否定しません。このいい暮らしをしたいという欲求が、戦後の経済成長の原動力になったわけですが、問題は物質的成長という言葉に憑りつかれてしまって、「足るを知る」を忘れてしまったことです。「もっと」「もっと」とおカネやモノを追究することが、やがてストレスの原因になってしまった。魚は頭から腐ると言いますが、今、日本のトップたちは「物質的成長教」に毒され、腐っています。東芝しかり、森友学園の国有地払下げ

・格差社会で不寛容な社会になっている。こうした状況に逆らうかのように、40年もやっていることに頭が下がる。今、子ども食堂をやっているNPOも出始めた。ぼっちゃんの代わりになればいいなと思う。

・不都合は見て見ぬふりをするのが最近の風潮だが、ぼっちゃんは、それとは真逆。なぜやるのか、と聞かれた時、「子どもから面と向かって、助けて、と言われたことがない人には分からないんじゃないの」との答えは、非常に重い言葉だと感じた。

で見られるような高級官僚や政治家の腐敗、舛添元東京都知事の公私混同、石原元都知事と豊洲市場など、いくらでも腐った例は挙げられます。利己ではなく、みんなの「物心両面の幸せを追求する」ことが、大事なのです。

本来人間は、「衆生本来仏なり」の言葉にあるように、仏すなわち心のレベルが高い人間としての素質を持って生まれています。しかし、現世という社会の荒波にもまれてうちに、本性を忘れてしまっている。別に全ての人がぼっちゃんの真似をする必要はありません。あれは、ぼっちゃんを選んだやり方です。一人一人が、自分のやり方で、いいこと、利他を重ねていけば、仏になれるのです。

今日DVDに登場したぼっちゃんは、理屈抜きで子どもたちを救っています。代償を一切求めない姿勢は、まさに「菩提心」であって、人間究極の姿と言えます。自分と向き合って、本当にやりたいことを見つけて、それに全力投球して、自分の花を咲かせる。そうすれば、自然と心のレベルは高くなります。これこそが、「宇宙の意志」なのです。皆さんがぼっちゃんになる必要はありません。要はぼっちゃんのように、自分の居場所で100%完全燃焼させる生き方をする、ということなのです。

## 応援団講義 国民の財産を叩き売った財務省 川村晃司さん

応援団講義は、テレビ朝日のニュースコメンターでジャーナリストの川村晃司さんが行いました。

川村さんは、「ぼっちゃんが住んでいる広島市基町には、ゆかりがある。中学生時代、自分が住んでいた山口から夏休みや春休みになると、よく広島に遊びに行った。広島には写真館を営む叔父が住んでいて、叔父の家は、ぼっちゃんの近所だった。それにぼっちゃんのプロデューサーは身

内の人物であり、何か深いつながりを感じてしまう。あの番組が提起しているテーマは、現代社会への警鐘であるから、第二弾が制作され、ぼっちゃんの歩みを取り上げる気がする。楽しみだ」などと語った後、安倍政権にとって最大のスキャンダルである森友学園問題や、アメリカのトランプ政権などについて、次のように話しました。

## ● 政治家としての覚悟がある小泉さん

・小泉さんは原発推進側の話を信用して原発を推進したが、東日本大震災によって原発がいかに危なく、カネがかかる発電システムだと知って、日本記者クラブで会見して、原発ゼロを宣言しました。このクラブは1968年に発足しましたが、この会見には489人の記者は駆けつけ、日本人ゲストでは最多の記者を集めました。

・小泉さんが一貫しているのは、政治家としての覚悟が根底にあることです。政治家の決断は行政を動かす。政治の

トップである現職の総理大臣が、原発ゼロを打ち出せば、官僚たちは総理の意向に沿って動くものです。

・私が三木武夫総理番をしていた時の話。総理番は、総理の一挙手一投足をキャップに伝えることが役割ですが、三木総理の睦子夫人は、決して総理夫人という肩書をつけずに活動していました。細川護熙総理の佳代子夫人も、肩書きを付けずに活躍していました。彼女たちは、個人としての生き方をしっかり持っていたから、総理夫人といった肩

書はいらないのです。

・ところが、安倍晋三総理の昭恵夫人は、総理夫人の肩書きなしの活動はしていません。それに、夫人には、経産、外務省から常時、税金で秘書3人、非常時には新たに3人が夫人付きとなって、夫人の活動を手助けしています。総理夫人はファースト・レディであり、総理官邸は私人として切り抜きたい意向だが、総理夫人付き秘書③の行動を、私的行為と理解する人は少ないと思います。

## ● 教育勅語復活を狙うウルトラ保守

・先の無謀な戦争で日本は敗れ、この反省にたつて教育基本法が成立し、新たな憲法で、天皇は国民の象徴と位置付けられ、民主主義社会が誕生し、今日に至っています。これをウルトラ保守勢力は嘆き、一貫して教育勅語の復活、復権を狙っています。

・ウルトラ保守には、教育勅語をベースにした共通のネットワークがあり、今回の森友問題は、ウルトラ保守の内ゲバではないのかと思います。稲田防衛相は10数年前、籠池理事長を絶賛したのに、今になって、しらを切りましたが、嘘はすぐばれました。一年前には、自衛隊感謝状を森友学園幼稚園に贈っています。しかし、偏狭なナショナリズムの流れが、ここまで来ていることに驚きます。

・安倍総理、昭恵夫人、籠池理事長には、教育勅語を学校教育の中で普及したい共通の理念があり、その中で9億円の国有地を8億円もダンピングして校舎建設を応援するという不透明な動きが出てきたのです。財務省側に、ダンピングした経緯を記録した文書がないのは極めておかしい話です。

・自分が大蔵省記者クラブにいた当時の複数の大蔵官僚に聞いたところ、彼らは政治家から公共事業の陳情があれば、いくらでも予算を調達できたということでした。鉛筆をなめる、とよく聞きましたが、ゼロを一つ増やすことは造作ないことだそうです。しかし、8億円ダンピングの記録がないとは、信じられない。隠しておかなければならない事情がある証拠だ、と言っています。

・総理は、会計検査院が調査しているから問題ない、と言っていますが、関係書類がなければ、会計検査の対象とはならない。会計検査院には期待できないということです。

・昭恵夫人は3回、森友に行き講演しています。総理夫人としての昭恵夫人は、応援団として利用され、名誉校長のポストに就きました。こうした背景があるから、大阪府も、財務省も、昭恵夫人、総理に対して、忖度が働くのは当然であり、籠池夫妻は忖度が働くことを意図して、昭恵夫人を利用しました。昭恵夫人は、こういった動きは全く知らないと言っていますが、常識的に、昭恵夫人のコメントは虚偽ではないかと思えます。籠池理事長をウソ発見器にかけたけれど、ウソとの反応は出なかったそうです。

・国会での籠池理事長の証言は、偽証すれば罪に問われるという条件の下で行われましたが、内容は極めて具体的でした。昭恵夫人は、同行していた夫人付き秘書を人払いし

・森友学園問題は、ウルトラ保守がビジネスの対象とする教育勅語復権がベースにあります。教育勅語は、天皇のために国民はあり、国の存続が危うい場合は、国のため、天皇のために、命を捧げるといった内容です。昭恵夫人はこれに感動したとして、名誉校長に就いたのです。安倍総理も、森友学園の籠池泰典理事長の愛国教育に感動したと意見を表明しています。

てから、自分に100万円を渡した、と言っており、昭恵夫人はこれを否定しています。密室の中でのことだけで、真偽は分かりませんが、昭恵夫人は何と言おうと公人であり、公の場での説明責任はあるはずで

・安倍総理は、不都合が起きると、すぐ名誉棄損の訴訟をすることが好きな人ですが、今回の問題については、一切それを言わない。おかしいことです。籠池理事長の証人喚問は、昭恵夫人や自分が侮辱されたのが気に入らない、証人喚問で決着させ、籠池理事長を葬ろうと行ったが、逆に疑惑は深まったと言えます。

・9億円から1億円へのダンピングへの関連を疑わせる、夫人



トランプ政権の危うさを説く川村さん

付き秘書が財務省近畿財務局に送ったファクスとその返事が明るみに出ましたが、その時の菅官房長官のあわてぶりは滑稽でした。予期せぬ出来事に遭ったようで、不用意な文書開示となりました。それも疑惑をさらに深めるものとなりました。

・政治は国民を幸せにするためにあり、税の公平処理が原則。森友学園の問題が明るみに出た発端は、豊中市が公園用地として、国有地を買った際の価格と、隣接国有地を森友学園が買った価格とに大きな差があることを、豊中市議が気づき、情報公開を求めたことがきっかけでした。財務省が、総理や総理夫人の意向を忖度して、国有地のダンピングとなったのですが、関連する文書は既に破棄したと財務省は言っています。一個人のために、国民の財産である国有地を、財務省という国の組織が、ただ同然で提供することは、決して許されることではありません。

## ● 気に入らないニュースはフェイクニュース

- ・トランプ氏と安倍総理との共通点はマスコミが嫌いということ。
- ・トランプ氏は、自分にとって不都合な本当のニュースを「フェイクニュース」、偽りのニュースと言っています。これも安倍さんと同じです。森友問題で安倍総理は、つい最近まで仲間であった籠池理事長を「嘘つき」と貶して、昭恵夫人の主張の方が正しいと、情報を流している。
- ・アメリカの今日の混乱は、昨年の大統領選で、トランプ氏は、投票総数でヒラリーに負けましたが、獲得した州の数がヒラリーより多かったから勝利でき、それによって大統領に就いたところに原因の一つがあります。トランプが勝利した州は、プアホワイトと呼ばれる貧しい白人が多い州で、オバマ前大統領は、プアホワイトのために、オバマケ

アと呼ばれる公的健康保険制度を作りました。トランプ氏は、民間保険の代弁者であるから、オバマケアを否定しましたが、支持者であるプアホワイトは、これに反発しました。結局トランプ氏はオバマケアを継続するしかなくなりました。

・オバマケアのように、トランプ氏は駆け引きで政治を動かそうとしているから、今後どう展開するか見当はつかないのに、それにもかかわらず、日本はトランプべったり。危うい日本だと思う。

㊦ 昭恵夫人の意に沿って行動した夫人付き秘書は8月6日付でイタリア大使館一等書記官に異動。森友問題の真相隠しではないかとの指摘もある。

## 塾生感想 権力者は「ばっちゃん」を見習え

○…森友問題についての川村さんの講義を聞いて、腑に落ちました。真実がどこにあるのか、これからも注視していきたいと思います。塾生五訓の中に、「塾生は塾で学び得たものを行動に移し、社会の貢献に努める」とあるので、自分ができる社会貢献を探して実践していきたいと思います。それにしても、行き場を失った子供のために「ばっちゃん」が40年続けている「飯食べさせ活動」には脱帽、感動です。

○…「ばっちゃん」を涙ながらに見ていました。当たり前なのが、何と幸せなのかと実感しました。経済的には豊かになった日本なのに、居場所のない子どもが増えていることは、未来の日本にとって大問題になりそうな気がします。

○…森友学園に関する話を聞いて、安倍総理夫妻は私たちの常識とは異なる世界の人だと思いました。常識があるなら、総理夫人がしていることと悪いことは気づくはずですが、真実は分からないが正直に生きた方が、よく眠れると思うのですが…。

○…阿部さんの大津波からの避難体験。靴はひとつも濡れなかったと明るく話すところに魅かれました。アメリカでの語学留学生活、北米大陸バイク横断旅行も明るく話してくれました。語学学校の先生が阿部さんを「キュート」と褒めたのは何故かが分かった気がします。「ばっちゃん」と今の政治家を比べると、対極あると言えます。ばっちゃんは無償の愛を貫き、政治家たちは政治を商売にして儲けようとしています。教育勅語さえもビジネスチャンスにしている。全く嫌になります。

○…「心の居場所」作りをしている「ばっちゃん」の存在と活動は、親として身の引き締まる思いでした。バラバラになってしまった家族が社会に与える負の影響や負の連鎖の深刻さを知り、表面上は豊かな日本の裏側についても考える必要があります。

○…阿部さんの両親は早くに亡くなり、普通なら可哀そうとなるが、阿部さんは早く亡くしたことで、「厳しく自分を育ててくれた」と言います。人を育てることの本質、奥深さを再認識しました。ばっちゃんの見返りを求めない姿勢、使命感を超えての活動は、素晴らしいとしか言えません。



夜遊び学ではマル秘の話も出る

○…阿部さんの語りは全く奇想天外なドラマを見た感じで、素晴らしい人生だと感心するだけです。60歳で仕事の一線からひき、語学留学、北米大陸バイクの旅と、驚くばかりでした。

○…以前から安倍総理は胡散臭いと思っていましたが、やはり彼は国粋主義者（もどきかな）と確信しました。残念ですがそんな彼を総理にしたのは私たちです…。

○…川村さんの話は日本の社会問題を含めた分かりやすいものでした。また生き方塾で話してほしい。ばっちゃんの子どもたちに寄り添う姿勢は自然体です。制度や仕組みをいくら作っても、うまくいかないのは、心の中まで入っていないからです。ばっちゃんを見習ってほしい。

○…阿部さんが話していた「スピード感が大切」は、勉強になりました。ぜひ役立てたいと思います。ばっちゃんの見返りを求めない愛の姿を自分も見習いたい。

○…阿部さんの行動力に感服。もう少し生きることへの考え方を聞きたかった。川村さんの話が、森友に終始してしまったのは残念でした。豊洲にしろ、森友にしる官僚、政治家の無責任が招いた結果なのに、彼らは責任のがれをしているばかりでうんざりです。行動の判断基準としてフィロソフィを持つべきです。